

卒業する君に

大切にしてほしいと思うことを、光陵を卒業していく君にお話する。

一つ目は、「友を大切にしてほしい」ということ。

新たな環境に移るのだから、頻繁に会う人が4月からは変わり、高校時代に知り合った友と会う機会は減ることと思う。淋しさもあろうが、週末にでも会ったときには、これまで見えなかった友のさらなる素晴らしさを感じ取れるというものだ。また君には、話す心地よい相手という人がいるに違いない。その人は、きっと君にとって大切な友だと私は思う。それから、これはとても大事なことなのだが、君のことを必要とする人はかならずいるということを忘れることのないように。高校での友人を大切に、これから出会う新たな友人を大切にしてほしい。

二つ目は、「公正に、そして誠実に人と接してほしい」ということ。

村上春樹さんの『ダンス・ダンス・ダンス』の中で、物語の中心にいる34歳にして未だ人格が確固としない人物が、13歳にしてちょっと大人びた、でも危うさの漂う少女に諭し語る場面がある。

「人の生命というのは君が考えているよりずっと脆いものなんだ。だから人は悔いの残らないように人に接するべきなんだ。公平に、できるだけ誠実に。そういう努力をしないで人が死んで簡単に泣いて後悔したりするような人間を僕は好まない。」

この「悔いの残らないように人に接する」というのはなかなか難しく、難しいからこそ「べき」なのだと思う。ではどのように接するかというところで、「公平に、できるだけ誠実に」となっているのだが、これもまた難しいことであることから「努力」という語が使われているのだろう。「人が死んで簡単に泣いて後悔したりするような人間を僕は好まない。」というの重い言葉である。

勉強をする目的の一つは、無知による狭量、偏見に陥らないためだと話した。言い換えるならば、知らないままにすることで狭量に陥ったり、知らず知らずに相手を傷つける行為の主体になってしまう危うさを私たちは持っているということだ。だから、公正に判断し、その公正さに裏付けられた誠実さをもって人と接することのできる人となるためにも、これからも学ぶ姿勢を大切にしてほしい。君が持つ生まれたやさしさに、身につけようと努めて身についたやさしさを加えてほしいと願っている。

三つ目は、「公正に、そして誠実に自分に向かってほしい」ということ。

私たちは様々なことやものに取り巻かれている。そして、高校から大学へというように段階を一つ変えていくごとに、君を取り巻く環境は拡大される。小さな社会から大きな社会への変化だね。拡大されると複雑にもなり、ときに煩わしくなるものの、君は社会から多くの恩恵を蒙っていく筈だ。言う迄もなく、君の存在は社会の宝であり、君の社会への貢献も必要だ。このように、社会と無関係に生きられないものだから、私たちは他者からの評価の渦の中に置かれざるを得ないのかもしれない。

他者から受ける評価というのはとても気に掛かるものだ。誉めてもらえば嬉しいけれど、けなされたら辛いよね。とりわけ、自分の意図していないところを突かれて酷評でもされようものなら、初めは相手の無理解に腹立たしさが生じるのだけれども、その後から徐々にまいってしまい、自分を見失うことにもなりかねない。匿名の評価は、ほとんど悪意の現れに思えてしまう。

評価というのは、評価する人の価値観に基づいて行われるものであり、君の価値観に基づいて他者が君を評価しているものではない。社会と無関係にはいられないと言っても、他者がつくった君のイメージに安穏とする根拠もなければ、言う迄もないことだけれど自分を否定する必要もないことだ。他者の目にどう映るかではなく、相手の君への評価を受け止めつつも自分自身で自分をみつめる努力だけは惜しまずに続けてほしい。迷うこともあるだろうけれど、きっと君なら大丈夫だ。

明日の卒業式、堂々と胸を張って臨んでほしい。未来の、心やさしき社会のリーダーに、カンパイ!!